

教職レディネスを視点とした中等美術科教員養成における実技指導 —版表現での実践的指導力形成を図る大学授業の取組を通して—

竹内 晋平 奈良教育大学美術教育講座 (美術教育学)

(平成26年5月7日受理)

Instructions of the Techniques for Secondary Fine Arts Teacher Education in View of Readiness for Teaching : Through Teaching a College Course to Help Students Develop Practical Teaching Ability for Printing Expressions

Shimpei TAKEUCHI

(Department of Fine Arts Education, Nara University of Education)

(Received May 7, 2014)

Abstract

In this study, the author had the opportunity to teach one of the practical courses offered by the college: "Painting V: Printmaking," designed for students who become secondary fine art teachers. In addition to teaching pedagogical, it is critical to help students improve their readiness for teaching, since such efforts can lead to the development of their practical teaching ability when teaching fine arts courses in the future. It is desirable, therefore, to not only help students develop technical skills necessary for teaching but also give them practical teaching ability by which they can develop a proactive approach in developing educational materials and instructional methods pertaining to the acquired skills. This study aims to explore how effectively one can provide practical teaching ability to help students achieve readiness for teaching, while helping them improve technical skills required for printing expressions as they teach in art classes.

"Painting V: Printmaking" class used silk screens as fine arts teaching materials often employed in art classes at junior and senior high schools. In the beginning of the class, my students were appreciating printing art works, and then to deepen their understanding of characteristics of printing expressions, such as "plurality," "indirectness," and "fortuity." Photomechanical process was employed so that students were able to deal with the silk screens. In addition, students were able to develop technical skills by experiencing the whole process from designing the draft to plate-making, to printing, and to organizing screen structures. After the course, students had described free-response about "characteristics of printing expressions" and "instructions on printing expressions in junior and senior high school education." Analyzing the free-response surveys through text-mining, this study concluded that efforts at "Painting V: Printmaking" to help students improve their practical teaching ability as part of readiness for teaching had been proven effective.

キーワード：中等美術科教員養成,
版表現,
教職レディネス

Key Words : Secondary Fine Arts Teacher Education,
Printing Expressions,
Readiness for Teaching

1. 序

1.1. 研究の背景と目的

本研究は、拙稿「中等美術科教員養成における教職レディネスの形成 ―省察的活動を導入した「中等教科教育法Ⅰ（美術）」の実践を通して―」⁽¹⁾における成果と課題を踏まえ、新たな視点を加えて同研究からの展開を図る関連的研究である。筆者による前研究においては、教科教育科目での実践をもとにして受講者の教職レディネスの形成について考察した。今後も教科教育担当教員としての立場から、継続的な実践と検討を行う必要があると考えている（上記の課題研究は、教科教育科目において推進中である。稿を改めて報告したい）。

その一方で筆者は、教科専門科目（実技科目。以下同様とする）である「絵画Ⅴ（版画）」の指導を担当する機会を得た。教科教育科目に加えて、美術に関する実技指導を行う中でも教職レディネスを高める意図をもって授業改善を行うことは、中学校・高等学校の美術科教員を目指す学生の実践的指導力の向上に資すると思われる。つまり、筆者は実技指導においても美術に関する技能形成に加えて、専門領域を教材化する能力や専門領域特有の指導技術等の教職的資質についても受講者に意識化させる指導を行うことが望ましいと考える。

本研究では、「絵画Ⅴ（版画）」での実技指導において、版表現に関する受講者の技能形成を図るとともに、教職レディネスの形成を意識した指導を行う効果について検討することを目的としている。なお同授業科目において扱う版種は、中学校の教材資料等⁽²⁾でも孔版として紹介されているシルクスクリーンを選択することとした。

論文構成は以下の通りである。まず第1章において先行研究の概観、およびそれらと本研究との比較を行い、位置づけを明確にする。第2章では本研究が扱う2つの概念についての予備的な考察を行う。そして第3章において教科専門科目「絵画Ⅴ（版画）」での実践経過および受講生の自由記述の分析等を報告し、終章では成果と課題、および今後の展望について述べることとする。

1.2. 先行研究の動向と本研究の位置

本研究に関連する2つの概念をもとにして先行研究の検索を行った。その概念は、美術科教員養成における教職レディネスの形成に関連したもの、そしてシルクスクリーンの教育的意義について言及しているものという2点である。

1.2.1. 美術科教員養成における教職レディネスに関して

冒頭でふれた筆者による前研究において、標記の概念に関する先行研究について詳細な検討を行った⁽³⁾。重複するため、本節では著者および論題の再掲にとどめる。

- ・新井哲夫・金井則夫「図画工作・美術科教育に求められる専門的力量形成に関する検討（1）―図画工作・美術科教育に求められる専門的力量とは？―」⁽⁴⁾
- ・辻泰秀「教育学部・大学院教育学研究科における授業改革の試み―実践的指導力を培う図工・美術科教育の授業―」⁽⁵⁾
- ・山田康彦・上山浩・三輪辰男・奥田二郎「図工・美術分野における教員養成PBL教育シナリオの開発（1）」⁽⁶⁾
- ・松原岳行「中高美術の教科指導力育成に関する考察（1）―教科指導法研究の授業評価アンケート結果―」⁽⁷⁾

筆者による前研究は、上記の先行研究を踏まえたものであったが、実践のフィールドを教科教育科目に限定したため、実践の経過において受講者の関心や意識の所在は「授業」「生徒」等に関するものへと変化する傾向がみられた⁽⁸⁾。受講生が指導観や生徒観等の具体的なイメージをもったことは成果の1つと考えられるが、美術に関する専門的知識の理解と専門的技術の習得に裏打ちされた実践的指導力を形成することも重要といえる。このため本研究では教科専門科目における教職レディネスの形成の可能性についても検討する必要があると考えた。

本節では、教科専門科目を実践のフィールドとした教職レディネス形成に関連すると考えられる取組・報告例についての動向をみてみたい。新井知生は教科専門科目担当教員の立場から、「以前は教科専門教員と教科教育教員のそれぞれの教育内容を、学生が自ら統合し現場の授業に対処していた、つまり大学教員はそれぞれの専門を教えっぱなしであったが、本来教育学部の教員は専門内容が現場の授業にどのように反映されるのか見通したうえで授業を行うことが必要であると考え」⁽⁹⁾と述べている。この言及は、美術科教員養成における実践的指導力の形成に対する教科専門科目の役割を強調する重要な指摘であると考えられる。また、上原一明・福田隆眞は、中等美術科教員養成における立体表現科目に学習指導要領の内容を関連させる意義について論じている⁽¹⁰⁾。いずれの報告においても、各領域の技能・技法を指導することに終始するのではなく、美術科教員に求められる実技指導者としての資質、つまり実技特有の教育技術を形成することの重要性を指摘していると解釈する。以上の検討を踏まえ、本研究では教科専門科目である「絵画Ⅴ（版画）」において、中等美術科教員として求められる技能習得と教職レディネスの形成を図りたいと考えた。

1.2.2. シルクスクリーンの教育的な意義に関して

シルクスクリーンを扱う先行研究のうち、教育的視座をもった報告例は管見の限り少ない。佐藤光輝による研

究は、シルクスクリーンをめぐる教育的視座をもった報告例の1つである。佐藤はシルクスクリーンの歴史を概観し近年の表現例を紹介した上で、教育の場にシルクスクリーンを導入するにはコンピュータ（画像編集ソフト）の活用が効果的とある指摘している⁽¹¹⁾。佐藤はシルクスクリーンに関して技法面から詳細に検討しているため、表現活動への支援のポイントについての提案も具体的である。一方、学習者への効果についての言及は、佐善圭による報告例がある。佐善は、学習者の造形活動への意識を良質なものと改善する意義についてふれ、「今回の孔版版画であるシルクスクリーン版画は、これから保育者となる学生の造形演習課題として適当である」⁽¹²⁾と述べている。このような佐善の保育者養成という立場からの指摘は、シルクスクリーンを扱うことを技能の習得のみにとどめるのではなく、保育士としての資質形成をねらいの1つとして主張している点で特筆される。

1.2.3. 本研究の位置づけ

本節では2つの概念に関する先行研究の概観をもとにした議論を行った。これを踏まえて、本研究および授業実践の推進方針を下記の3点とした。

- ・「絵画Ⅴ（版画）」は教科専門科目であるため、受講者の技能習得を第一義としながらも、中学校・高等学校の美術科教員に求められる教職レディネスの形成を図る授業実践を行う。
- ・授業実践の際には、受講者の制作活動に積極的な介入を行い、受講者に対して中学校・高等学校美術科における学習形態の意識化を図る。そして、その実践経過を第3章において報告する。
- ・授業実践の効果を検討するため、「絵画Ⅴ（版画）」終了時の受講生による自由記述の分析を行う。その方法は、筆者による前研究と同様にテキストマイニングソフトを使用して頻出語等を抽出するものとする。

2. 予備的考察

2.1. 教職レディネスとしての美術科での実践的指導力

筆者による前研究において、教職レディネスは教員養成課程大学生の学びを成立させるために必要であるとの立場をとった。その上で a. 教職に関する意識・態度等の心理的なレディネス、 b. 学習指導に関する知識・技能等の実践的指導力に関するレディネスという2分類を行った⁽¹³⁾。前研究において筆者は、教職レディネスに関して教科教育科目のみの実践を通して検討を行った。前研究における議論と、本研究で扱う教科専門科目での教職レディネスがどのような関係性なのかについてイメージを示したものが、図1である。教科教育科目で

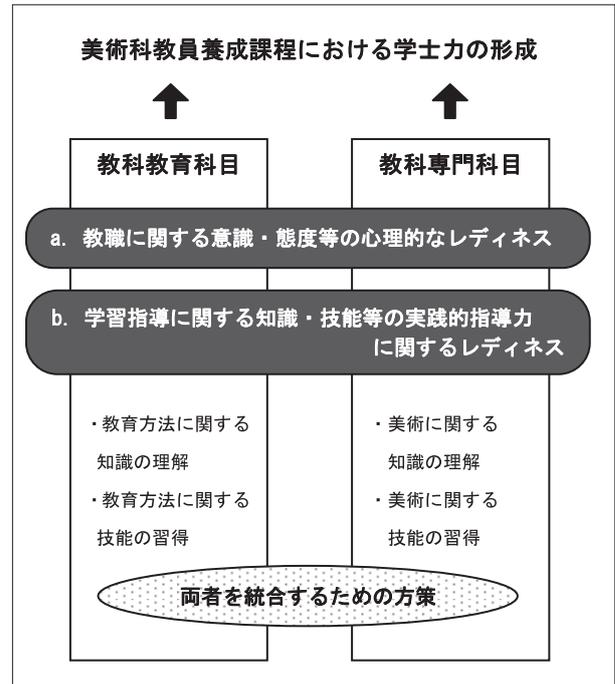


図1 教科教育科目と教科専門科目との間にまたがる教職レディネスと「方策」のイメージ

あっても教科専門科目であっても、それぞれの授業科目では「知識の理解」や「技能の習得」等の独自の教育目標に基づいた指導が行われている。ただし個々の授業科目は、教員養成課程を構成している要素である以上、教職レディネスの形成に資するものでなければならないとするのが、本研究の考え方である。つまり、美術に関する知識や技能についての指導であっても教職的な資質を養うという視点が求められているという立場である。上記および図1に示したように、教職レディネスを教科教育科目・教科専門科目という両輪で形成していくためには、両者の教育内容を統合するための何らかの方策が必要であると考えられる。美術科教員養成におけるこのような「方策」に向けた取組として示されているのが、前章で述べた新井研究や上原・福田研究であることとらえることができる。

一方で、前述の「方策」に関連して包括的かつ組織的に行われた研究事例がある。それは上越教育大学・鳴門教育大学・兵庫教育大学に所属する研究グループによって進められた「教科専門と教科教育を架橋する教育研究領域に関する調査研究」⁽¹⁴⁾である。それによると、筆者が図1において指摘する「方策」に相当するものとして、「教科内容学」と称される学問領域の存在を指摘している。同調査研究報告書では、「教科専門科目」（免許法でいう「教科に関する科目」）自体を教員養成に固有な専門科学である「教科内容学」として構成している⁽¹⁵⁾と述べられている。この教科専門科目が教職的な視点をもつ意義についての指摘は、本研究の立場に近接

するものであり重要な示唆といえる。一方で教科教育科目と教科専門科目との中間的な科目を創設するという「方策」の存在も指摘されているが⁽¹⁶⁾、本研究では教科専門科目そのものが教職的な資質を養うという視点をもって授業運営されることが「方策」の重点であるとの立場をとる。

第3章においては、このような考え方にに基づき、筆者が授業を担当した教科専門科目「絵画Ⅴ（版画）」の実践経過とその考察について報告する。

2.2. シルクスクリーンによる版表現とその教育的意義

2.2.1. シルクスクリーンの特性

絵画表現における技法の1つとしての版表現の歴史については、第1章でふれた先行研究等で詳細に論じられているため、本項においては割愛したい。また、版種（凸版・凹版・平版・孔版）ごとの原理や技法、表現の効果等の解説についても各種の専門書等に譲ることとする。

本研究で中心的に扱うシルクスクリーンによる表現特性に関しては、先行研究として扱った佐藤の研究が詳しい。特に写真製版法に関連して佐藤は、「シルクスクリーンが、版画において重要な領域を占めるようになりはじめたのは、1960年代に入ってからである。その主な理由は、シルクスクリーンが、版画の中で最初に、製版の工程に写真を取り入れることで、シルクスクリーンは表現の分野で飛躍的な拡大をみせていく⁽¹⁷⁾」と指摘している。この言説にあるように、シルクスクリーンによる作品としては、1960年代のアメリカをはじめとする現代美術の作品群が想起されやすい。特定の人物や商品等、既成の図像がシルクスクリーンによってシンボリックに繰り返し表現される作例からは、美術家の表現方法にもたらした大きな変革を感じる。つまり、何もないところから創造することのみが美術的活動ではなく、流用や複製による表現も美術的活動であるという認識をアートシーンの中に確立したのも、シルクスクリーンという技法の普及による影響が大きいといえる。

このようなシルクスクリーンがもつ意義と特色は、コンピュータグラフィックスの技術が個人にとって手軽な表現方法として普及している2010年代にあっても、色褪せるものではないと考える⁽¹⁸⁾。

2.2.2. 学校教育における版表現とシルクスクリーン

学校教育でのシルクスクリーンを教材化する意義を議論するにあたり、広義の版画という概念がどのように学校教育に導入されたのかについてふれておきたい。

美術科教育における版画の導入時期については太田耕士が指摘している。それによると版画は自由画教育運動との連動によって大正期に学校への導入が始まったとされている⁽¹⁹⁾。戦後は民間美術教育運動が隆盛する中で日本教育版画協会が設立される。太田は戦後の版画教育

運動の当事者として、「生活綴方運動と密接に結びつきながら、版画教育はその造形性を強調し、版造形の特質を明らかにし、子どもの本能的な欲求の解放と造形表現の領域の拡大を志向し、版画表現活動のもつ一切の教育的機能を明らかにすることに努めた⁽²⁰⁾」と述べている。このような太田の論調は、「創造美育協会」が目指した造形における抑圧からの解放との共通性を感じる。また後に「新しい絵（画）の会」が生活画を軸とすることを活動方針としていった点との関連もみられる。特に箕田源二郎の版画教育への関与とその後の「新しい絵（画）の会」との関連については金子一夫によって指摘されている⁽²¹⁾。ただし、昭和20年代までの版画教育運動は、凸版（木版・紙版）が中心であり、凹版の材料として硬質ビニール板、セルロイド板、ビニールコート板紙等が普及していたとする言及⁽²²⁾はあるが、この年代に平版・孔版が積極的に教育現場で導入されていたとする指摘は見当たらない。

その後、昭和33年告示の中学校学習指導要領（美術）のA表現（ア 絵画）において、「（ウ）表現方法は、素描的表現、彩画的表現、その他（版画など）とする⁽²³⁾」という位置づけがなされた。おそらく教育内容の高度化が図られた昭和30-40年代以降に、様々な美術の技法とともに、シルクスクリーンが中学校・高等学校の教育現場に導入されていったものと考えられる。

なお、現行の学習指導要領における版表現（シルクスクリーン）に関する言及内容は下記の通りである。

- ・中学校学習指導要領（美術科）、2008年：

本文内での言及なし（A表現の解説において材料・用具、表現方法の活用に関連して木版を例示）。

- ・高等学校学習指導要領（芸術科・美術）、2009年：

本文内での言及なし（A表現の解説において版画を表現方法の1つとして例示）。

- ・高等学校学習指導要領（専門学科・美術科）、

2009年：

「版画」の本文内でシルクスクリーンについて言及（解説では次のように言及されている。「シルクスクリーン」では、多様な製版の方法の特質やその活用を学び、鮮明な発色を生かすなど、効果的な表現を工夫することが大切である⁽²⁴⁾）。

3. 授業科目「絵画Ⅴ（版画）」の実践経過

3.1. 授業科目「絵画Ⅴ（版画）」の概要

本章においては、版表現の教育的意義への理解を図りその実践的指導力を形成することが教員養成に有益であるとの立場から、教科専門科目である「絵画Ⅴ（版画）」

において実技指導とともに、受講生の教職レディネス形成を見通した授業実践を展開することとする。

教科専門科目「絵画Ⅴ（版画）」は教員養成課程・美術教育専修における教科専門科目である。中学校教員免許状・高等学校教員免許状を取得する際に選択必修となる授業科目である（1単位。履修は2回生以上）。平成25年度には12名が受講し、集中講義の形式で授業を実施した（平成26年2月12～14、17日、計4日間）。同授業科目における指導の概要は下記の通りであった。

・授業の目的

中学校・高等学校美術科指導を視野に入れた版画制作を行い、連作による版表現の可能性を追究するとともに、版表現の教材化、技術指導のあり方（全体指導・グループ指導・個別指導）について考察を深める。

・授業計画

- | | |
|------|------------|
| 第1回 | 版画概説 |
| 第2回 | 様々な版画作品の紹介 |
| 第3回 | 版下の作成① |
| 第4回 | 版下の作成② |
| 第5回 | スクリーンの張り込み |
| 第6回 | 製版① |
| 第7回 | 製版② |
| 第8回 | 試し刷り |
| 第9回 | 画面の構想 |
| 第10回 | 印刷① |
| 第11回 | 印刷② |
| 第12回 | 印刷③ |
| 第13回 | 仕上げ |
| 第14回 | 展示作業と相互鑑賞 |
| 第15回 | まとめとレポート記入 |

3.2. 実践経過

3.2.1. 版画概説・シルクスクリーン技法の概説

第1～2回の授業においては、版表現に関する概説を行った。指導方法としては、中学校・高等学校の美術科授業の展開を意図して板書（図2）を積極的に使用し、グループ内での話し合い活動や受講生からの発言を主体とした指導を行った。具体的には、「筆で描く絵画と版画との違いは何？」「なぜ版画という技法が生み出されたのか？」等の発問によって版画の本質について話

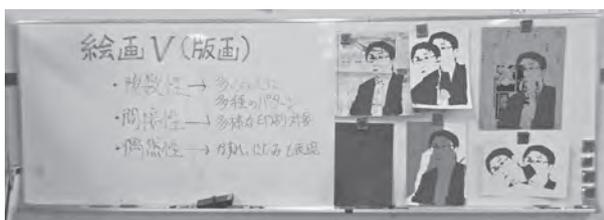


図2 第1～2回授業時の板書

し合った。その後、スライドの提示により、アンディ・ウォーホル（Andy Warhol, 1928-1987）やロイ・リキテンスタイン（Roy Lichtenstein, 1923-1997）、そしてロバート・ラウシェンバーグ（Robert Milton Ernest Rauschenberg, 1925-2008）等のシルクスクリーン作品の鑑賞を交えて、版表現の特性である「複数性」「間接性」「偶然性」についての理解を図った。そして、その後の制作活動においては、版表現の特性を生かすための「複製と反復、そして対比」というテーマで連作に取り組むことを伝えた。

第3～4回の授業では、具体的にシルクスクリーン作品を制作するための知識と技法に関する指導を行い、受講生による版下の作成を行った。今回の授業科目「絵画Ⅴ（版画）」では、写真製版法を扱うこととした。この技法による製版には、透過性のある用紙に黒インクで描画した版下を使用することが一般的である。同授業科目では「第二原図用紙」と呼ばれる透過性が高い用紙を使用し、写真等の原稿はコピー機を併用しながら版下作成を進めた。なお、製版は受講生1人につき1版のみとしてサイズは八つ切（392mm×271mm）とした。

3.2.2. シルクスクリーンの製版作業

製版を行うためには、まずスクリーン枠にシルク生地を張り込む必要がある。張り込みには張力が必要であり、可能な限りたるみが生じることなくシルク生地をスクリーン枠に接着しなければならない。指導にあたっては、中学校・高等学校美術科授業での指導形式の意識化をねらいとして、グループ活動によってスクリーンの張り込みを行った。アルミ製のスクリーン枠と化学繊維（テトロン）のシルク生地を使用したため、アイロン・霧吹きを使用した張り込みと補助とを分担して行った（図3）。

次に、版面に感光乳剤を塗布する作業を行った。この感光乳剤には紫外線に露光すると凝固する性質があり、凝固した場所は印刷の際にインクの透過が遮られること



図3 スクリーンの張り込み作業

となる。紫外線によって露光する箇所と露光しない箇所は、黒インク（写真原稿等はコピー機を併用）で作成された透過性のある版下によって決定される。つまり、版下がポジフィルムの役割となり感光乳剤を紫外線によって凝固させる箇所をコントロールすることになる。このような原理を利用したのが、今回の授業科目で扱った写真製版法と呼ばれるシルクスクリーンの製版技法である。授業において、この写真製版法の手順等についての指導を行う際には前項と同様の理由により板書を使用した（図4）。版面への紫外線露光（図5）による写真製版には、ケミカルランプを装着したシルクスクリーン専用の製版機（株式会社ミノグループ製）を使用した。写真製版の後には、水洗いによって凝固しなかった感光乳剤を取り除き、製版を終了した（その後、乾燥を経て「後焼き」を行い、さらに版面を紫外線露光によって凝固した）。

なお、製版作業においては教員が露光時間の調整を助言したり版面の水洗いを支援したりするなど、積極的な介入指導を行った。受講生の中には露光時間等の関係で、1度目の製版が失敗となった場合もあったが、その際にも中学校・高等学校美術科授業で同様のことが起こった場合の美術教員の指導をイメージすることを促す助言と支援を行った。

3.2.3. シルクスクリーンの印刷作業と画面構成

版が完成した後、第8～13回授業においてはカラーインクと各色の用紙を使用して印刷等の作業を行った。その際、版表現の特性である「複数性」「間接性」「偶然性」を意識的に体験するため、以下のような助言を行った。

「複数性」に関連して

- ・1つの画面に反復して印刷できること。
- ・色を変更することができること（インクの色を変える・印刷用紙の色を変える）。

「間接性」に関連して

- ・用紙以外のもの（布・段ボール等）に印刷できること。
- ・孔版は転写による印刷ではないため、左右反転が起らないこと。

「偶然性」に関連して

- ・印刷の際に起こった、かすれ・にじみ・ずれ等も表現として活用できること。
- ・色の組み合わせを変えることで、予想外の色彩的な効果が得られること。

刷り上がった作品群を再構成し、前述の「複製と反復、そして対比」という制作テーマに基づいて連作として表現することとした。刷り上がった用紙を切り抜き、張り合わせて構成する、さらに加筆する等の操作を行い、最終的には2つの画面を対比させた画面構成を行っ

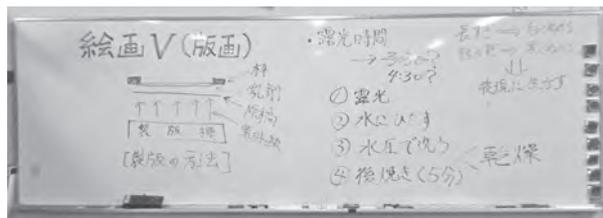


図4 第5回授業時の板書



図5 製版機による紫外線露光（写真製版）作業



図6 受講生による連作（「Lips」／兼廣麻衣）



図7 研究棟エントランスでの展示・相互鑑賞

た。受講生は第12～13回授業において、色による対比、印刷する素材による対比等を活用して連作表現を完成させた。

図6に示しているのは、受講生による連作の例である。この作例には、版表現によって反復された唇の形を生かしながらも、部分的な加筆やカラーージュによって左右の画面を対比させる試みが見られる。

3.2.4. 展示と相互鑑賞

作品完成後は、展示作業と受講生による相互鑑賞を行った（第14回授業）。可能な限り、他の受講生作品とも対比しながら鑑賞することを配慮し、大学研究棟（R12・文美棟）のエントランスの空間をギャラリーに見立てた展示を行った。展示作業の終了とともに受講生によるトーク形式の相互鑑賞を行った（図7）。近年、中学校美術科においても、学校施設を生徒作品によって積極的に空間演出を行う題材⁽²⁵⁾がとりあげられている。今回、「絵画Ⅴ（版画）」で試行したようなオルタナティブな空間への作品展示は、今日的な中学校美術科の傾向を受講生に意識化させるための試みでもある。

3.3. 実践後の受講者による自由記述の分析

「絵画Ⅴ（版画）」における受講者の学びの傾向がどのようなものであったのかについて分析するため、授業終了時の自由記述課題を対象としてテキストマイニングを行うこととした。筆者による前研究でも同様の方法で分析を行ったが⁽²⁶⁾、その手続きを本研究に援用するために改めて以下に再掲する。今回、テキストマイニングの処理に使用したソフトウェアはIBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0である。ソフトウェアによってテキストデータを処理する前に下記のリファインを行っている（テキストデータを手作業で修正、またはソフトウェアの機能を使用して語の統一、削除を行った）。

- ・明らかに誤記と判断される記述の修正
- ・同義語の統一

例)「高等学校」「高校」等の表記を「高等学校」に統一

- ・教職レディネス形成の分析とは無関係と判断される接続詞、動詞、名詞等の削除

例)「ある」「ない」「する」「いる」「それ」「もの」「また」「この」等の語をテキストマイニングソフトのカテゴリから削除

上記の手続きによって、2種類の自由記述をテキストマイニングの処理によって分析することを試みた⁽²⁷⁾。これらの自由記述を可視化したものが図8と図9である。

図8は、「版表現の特性に関して（複数性・間接性・偶然性に関して、制作を通して実感したこと）」という視点のもとに受講生によって作成された自由記述の可視化である。図中の各語を示している円の大きさは自由記

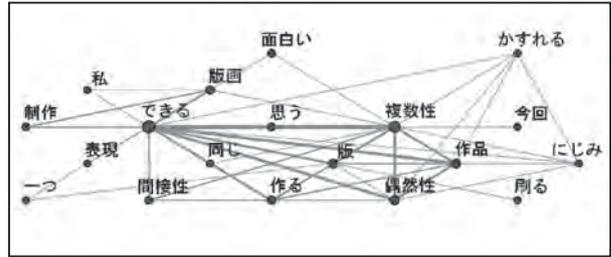


図8 版表現の特性に関する記述の可視化

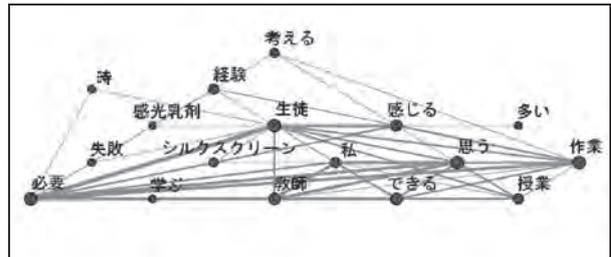


図9 美術科における実技指導に関する記述の可視化

述の中での頻度の高さを、円と円とを結んでいる線の太さは語と語との相関の強さをそれぞれ示している（図9においても同様である。なお、各語の位置や相互の距離は特定の意味を表すものではない）。この可視化からは、版画表現が「かすれる」（4名が記述。以下同様）、「にじみ」（4名）等の「偶然性」（7名）によって構成されていることを理解し、受講生自身がこの特性によって表現された「版画」（6名）を「面白い」（5名）と実感していた傾向を読み取ることができる。

ここでは、受講生12名の記述の中で最も出現頻度が高かった「できる」（11名）に着目する。「できる」との相関が確認されたのは以下の語である。

- ・「複数性」（9名）
- ・「偶然性」「作品」（7名）
- ・「作る」「版画」「版」（6名）
- ・「制作」「間接性」（5名）

上記のように「できる」との間に相関が確認された語には、版画制作や表現上の効果に関する語が多いことがわかる。また少数ではあるが「できる」と「私」との間にも相関が見られた（4名）。図8での相関を表す線を辿ると、「私」→「できる」→（版画制作）という受講生の意識をうかがうことができる。このような傾向は、中学校・高等学校での美術科授業に求められる指導者としての専門的技能の形成を示唆するものであると解釈される。

一方、図9に示しているのは「中学校・高等学校美術科指導における実技指導に関して（指導者の関わり方、支援のあり方について、制作を通して実感したこと）」を視点とした自由記述の可視化である。その可視化からは、受講生が「絵画Ⅴ（版画）」における学習を通して

中学校・高等学校での実技指導に求められると考えた概念を読み取ることができる。上記の可視化における最頻出語の1つである「必要」は12名のうち8名によって記述されていたが、この「必要」がどのような語と関連していたのかを具体的に示す。

- ・「生徒」(7名)
- ・「教師」「思う」「作業」(6名)
- ・「私」「授業」「できる」「感じる」(5名)
- ・「学ぶ」「シルクスクリーン」「考える」「時」「経験」(4名)

その他、少数であったために図9において可視化の対象としていないが、「失敗」(3名)、「支援」(2名)等の語と「必要」との間にも相関が見られた。受講生がこのような視点を得たのは実技を伴う教科専門科目の特性が影響したものと考えられる。つまり、受講生自身が制作活動を通して、「生徒」の立場を想定しながら「失敗」や「支援」を「経験」することで、中学校・高等学校美術科における実技に関する指導観を新たにすることができたと推察されるのである。

以上、2つの自由記述をテキストマイニングによって分析することにより、受講生の学びの傾向を示すことができた。頻出語の内容と相関の様態からは少なくとも、受講生は実技指導を受けることを通して版表現の指導に関わる専門的スキルと実践的指導力に関するレディネスを形成する傾向があったと解釈される。この点は本研究が意図している教職的資質を視点とした教科専門科目における授業改善の効果検証にも関連している。ただし、上記の分析では自由記述の量的な検討のみを行ったため、頻度や相関等のデータのみによって結論を得ることに限界があると考えられる。今後の継続研究では、量的な検討に加えて自由記述および学生作品に対する質的な分析が必要であるといえる。

4. 結語

本研究においては、教科専門科目自体が受講者の教職的資質を養うという視点をもって授業運営されることが重要であるとの立場からの授業実践とその分析を行った。本研究の成果は、受講生の自由記述を対象とした分析から実技指導を通じた教職レディネス形成の可能性を指摘したことにある。実際に「絵画V(版画)」の授業運営を行った筆者の率直な印象としては、教科専門科目での実技指導の第一義である技能習得以外の教育効果を改めて実感することができた。一方で教職的な資質を養うという視点をもった実技指導を行うことに関する授業運営上の支障は特に感じなかった。授業担当者がこのような視点をすることで、教員養成課程における実技指導のあり方を明確にすることができたように感じる。今回

のような授業実践によって教科専門科目担当者の意識にどのような影響を与えるのかについても、継続的な調査を進めたい。しかし、次のような研究上の課題も認識している。今回の実践では教職レディネスとしての実践的指導力の形成に焦点化して論を進めたために、本稿において実技指導における受講者の技能評価について詳細な検討を行っていない。技能面の評価と教職レディネスとしての実践的指導力の評価との間にどのような関連が存在するのかについて分析する必要がある。筆者としては現在のところ、この2つの能力が揃うことが前提となって美術科教員養成における学士力の形成につながっていくものと仮定している。今後の大学授業においてもそのような意識をもち、教科教育科目と教科専門科目とが両輪となって指導の効果を高めることを意図した美術科教員養成を進めていきたいと考えている。

付記

本研究を推進するにあたり、平成25年度 授業科目「絵画V(版画)」受講生の諸君より、画像・テキストデータ提供等の協力を受けた。ここに記して謝意を表したい。

なお、本研究は下記の助成を受けている(本稿は同研究助成報告書の一部を参照している)。

- ・平成25年度 奈良教育大学 学長(長友恒人) 裁量経費「「うつし(版、複写、複製)」活動をふまえた学士課程、大学院課程における教育方法の工夫と教育現場で生きる教材開発」(代表者:宇田秀士)

註

- (1) 竹内晋平「中等美術科教員養成における教職レディネスの形成 ―省察的活動を導入した「中等教科教育法I(美術)」の実践を通して―」、『美術教育学研究』, 第46号, 大学美術教育学会, 2014, pp.149-156
- (2) 例えば、中学校美術科の教材資料として全国的に使用されている下記の出版物などがあげられる。
京都市立芸術大学美術教育研究会・日本文教出版編集部編『美術資料』, 秀学社, 2013, p.26およびp.35
- (3) 竹内, 前掲論文, pp.149-150
- (4) 新井哲夫・金井則夫「図画工作・美術科教育に求められる専門的力量形成に関する検討(1)―図画工作・美術科教育に求められる専門的力量とは?―」、『美術教育学』, 第34号, 美術科教育学会, 2013, pp.15-31
- (5) 辻泰秀, 「教育学部・大学院教育学研究科における授業改革の試み―実践的指導力を培う図工・美術科教育の授業―」、『教師教育研究』, 第2号, 岐阜大学, 2006, pp.76-83
- (6) 山田康彦・上山浩・三輪辰男・奥田二郎, 「図工・美術分野における教員養成PBL教育シナリオの開発(1)」、『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』, 第30号, 三重大学教育学部附属教育実践総合センター, 2010, pp.1-8
- (7) 松原岳行, 「中高美術の教科指導力育成に関する考察(1)―教科指導法研究の授業評価アンケート結果―」

- 『九州産業大学国際文化学部紀要』, 第50号, 九州産業大学国際文化学会, 2011, pp.145-161
- (8) 竹内, 前掲論文, pp.153-155
- (9) 新井知生「『平面授業構成研究』授業実践報告—教科専門と教科教育の橋渡しのために—」『島根大学教育学部紀要』, 第45巻別冊, 島根大学教育学部, 2012, p.52
- (10) 上原一明・福田隆眞「美術教育における立体表現と中等美術教員養成について—新しい学習指導要領への対応—」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』, 第31号, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター, 2011, pp.140-142
- (11) 佐藤光輝「版画におけるシルクスクリーンの役割と可能性—教育における新たなアプローチを求めて—」『美術教育研究』, 第7号, 東京芸術大学美術教育研究会, 2001, p.28
- (12) 佐善圭「保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果Ⅲ—シルクスクリーン版画制作を導入した造形指導の実践的研究—」『岡崎女子短期大学研究紀要』, 第45号, 岡崎女子短期大学, 2012, pp.50-51
- (13) 竹内, 前掲論文, p.150
- (14) 平成22-23年度 文部科学省先導の大学改革推進委託事業「教科専門と教科教育を架橋する教育研究領域に関する調査研究」
- (15) 増井三夫・西園芳信「教科内容学研究的の現在と可能性(最終報告書)」三大学研究協議会編『教科専門と教科教育を架橋する教育研究領域に関する調査研究』, 上越教育大学, 2011, p.38
- (16) 同上
- (17) 佐藤, 前掲論文, p.23
- (18) 本研究に取り組んだ2014年に限定しても, 多くの美術館が現代美術における版表現に関連するテーマを扱った企画展を開催している。下記の企画展(開催日程順に列記)が同時期に開催されていることは, シルクスクリー
- ンをはじめとする版表現による流用や複製, そして反復が今日も注目され続けていることと表れと解釈できる。
- ・熊本県立美術館「ポップアートとアメリカ版画」(2014年1月9日-3月23日)
 - ・森美術館「アンディ・ウォーホル展 永遠の15分」(2014年2月1日-5月5日)
 - ・富山県立近代美術館「リフレイン—反復の魔力」(2014年3月1日-4月6日)
 - ・奈良県立美術館「アメリカ現代美術の巨匠達」(2014年4月12日-5月25日)
- (19) 太田耕士「日本教育版画協会の歩みと活動—版画教育史—」日本美術教育連合編『日本美術教育総監』, 日本文教出版, 1966, p.310
- (20) 前掲書, p.311
- (21) 金子一夫『美術科教育の方法論と歴史〔新訂増補〕』, 中央公論美術出版, 2003, p.215
- (22) 同上
- (23) 中学校学習指導要領(美術科), 1958年10月1日告示
- (24) 高等学校学習指導要領(専門学科・美術科), 2009年3月9日告示
- (25) 中学校美術科教科書に掲載されたものとして, 「校内を演出してみよう」(下記)等の例がある。
花篤實・新井哲夫・中村晋也監修『美術2・3下』, 日本文教出版, 2013, p.29
- (26) 竹内, 前掲論文, pp.152-155
- (27) テキストマイニングの処理を行った自由記述の総文字数と可視化の対象とした頻度は以下の通り。
- ・版表現の特性に関する記述の可視化(図8):
n = 12, 総文字数 = 2158文字, 頻度 = 4 ~ 9 度数
 - ・美術科における実技指導に関する記述の可視化(図9): n = 12, 総文字数 = 2374文字, 頻度 = 4 ~ 7 度数